自 然 環 境 保 全 活 用 調 査
その２

報　告　書

平成１６年３月

富　　田　　林　　市
富田林の自然を守る市民運動協議会
特定非営利活動法人　里山倶楽部

目　次

１．奥の谷モデル地区における将来プランの検討 ---------- 1

（1）隣接する南原地区の保全活用方針 ---------- 1

①　現地調査
②　保全活用の方向と課題

（2）自然観察路の整備方針 ---------- 9

①　現地調査
②　自然観察路のコース設定（案）

２．「奥の谷花ごよみ」の作成 ---------- 16

（1）春の花 ---------- 17

（2）初夏の花 ---------- 22

参考資料 ---------- 26

○奥ノ谷古墳発掘調査概要（1985.3 大阪府教育委員会）

○嶽山の植物
富田林の自然を守る会「富田林の自然№ 6」（1999 年 2 月 21 日発行）より

１．奥の谷モデル地区における将来プランの検討

(1) 隣接する南原地区の保全活用方針

①現地調査

里山保全活用ゾーン（H15 自然環境保全活用調査報告書を参照）内の南原地区は、奥の谷モデル地区に尾根をはさんで隣接する谷部で、奥の谷とは異なる環境と植生が見られ、モデル地区と同様に保全活用が求められる。そこで、「富田林の自然を守る市民運動協議会」のメンバーと同行して６～７月に現地を踏査した。（「南原地区現況図」参照）

①セイタカアワダチソウの草地

滝谷不動尊の駐車場に隣接する草地で、セイタカアワダチソウが繁茂しているが、草刈り管理が行なわれていると思われる明るい周辺部には、ネジバナが見られた。

②ため池Ａ

隣接駐車場の造成後に水面が縮小して現在のようになったと考えられる。周辺はササやセイタカアワダチソウ等の草地となっている。

③ヨシの草地

隣接駐車場の造成前は水面であったと思われる。ため池Ａの上流側でヨシが繁茂する。

④草原性の花々が見られた畦道

谷の入口であるため比較的明るい畦道となっており、周辺には様々な草原性の植物が見られた。特にタツナミソウは、嶽山周辺では今のところここでしか見つかっていない。

畦道の入口

タツナミソウ

ウマノアシガタ

アザミ

ウツボグサ

ヌマトラノオ

コマツナギ

ツユクサ

⑤ため池Ｂとスギ植林地

スギの植林地に囲まれたため池。池の水辺にはショウブが生育している。

ショウブ

⑥ササ草地

水田跡地のササ草地。南原の谷部はかつては水田として利用されていたが、現在はすべて放棄されており、ここから上流の放棄田には跡地ごとの微妙な環境（水分状況、日当たり等）によって様々な植生が見られる。

⑦カサスゲの湿地とヌマトラノオ

放棄田がカサスゲの湿地となり、かつての畦道沿いにヌマトラノオの群落やダイコンソウが見られた。カサスゲは嶽山周辺ではここにしか見られない。

⑧ネムノキ

ため池Ｃの堤にはネムノキが列状に生えている。

⑨ため池Ｃ （新池）

⑩ハンノキとガマの湿地

放棄田跡にハンノキが生育する湿地環境は嶽山周辺では少なくなっている（奥の谷にかつてあったハンノキ林は数年前の広場造成で消失した）。ハンノキの林床は手前がミゾソバで、奥にガマが生育している。

⑪ヨシの草地

⑫ミゾソバの湿地

⑬ため池Ｄとササ草地の堤

⑭スギ ・ヒノキ林とササユリ

比較的手入れがされて明るく、シダが生育するスギ・ヒノキ林の林床に、ササユリが見られる。花が咲いている個体だけで 20 輪近くが数えられ、嶽山周辺でもっともササユリの密度の高い場所のひとつと思われる。

②保全活用の方向と課題

■放棄田跡に見られる特徴的な植生

南原地区は、谷全体が農地としての機能をなくしてから十数年経っていると思われ、放棄田跡の一枚ごと、また数箇所のため池ごとに異なる植生が、それぞれの微妙な環境に即して見られる点が特徴となっている。

タツナミソウやカサスゲ、ダイコンソウ、ハンノキ林など奥の谷や嶽山周辺であまり見られない植物も生育しており、谷全体の環境保全が求められる。

■湿地や草地の保全・観察地としての活用

カサスゲの湿地より上流部は、放棄田跡ごとの特徴がよくわかる見本園的な様相となっており、現在も農地として利用されている奥の谷と対照的な草地や湿地を観察することができる。ササユリが見られるスギ・ヒノキ林も含めて、奥の谷と南原とを結ぶ観察路などを整備することで、多様な湿地や草地の自然の保全・観察地として活用ができると考えられる。

■入口部の開発造成の影響

しかしながら、南原地区の谷の入口部では、滝谷不動尊の駐車場拡張に伴う残土処分の造成工事が予定されており、その影響でカサスゲ湿地周辺から下流部の現在の植生は、残土造成によって埋め立てられ、タツナミソウなどの草原性植物が見られた畦道も消失することとなる。これらの草原性植物は、上流部のかつての畦道を草刈り管理することで再び生えてくる可能性がある。

背後の山を造成して拡張される駐車場

※本調査を行なった後、タツナミソウ、カサスゲ、ダイコンソウの一部を掘り取って、奥の谷の「水の生きもの池」及び「池田」の畦に移植した。

奥の谷に移植した↑タツナミソウとカサスゲ↑

■今後のモニタリング

南原の湿地や草地は、このまま放置すれば次第に多年草から木本植生に移行していくと考えられる。現在の状況を維持するには、場合によっては適度な草刈り管理や水路の維持補修なども必要になると思われるため、入口部の開発造成の影響を見守ることも含めて、今後もモニタリングをしていくことが望まれる。

(2) 自然観察路の整備方針

①現地調査

モデル地区内を通る現況道について、「富田林の自然を守る市民運動協議会」のメンバーと同行して12～1月に現地を踏査し、道の状況や自然観察路としての資源について調査を行なった（「現況道調査図」参照）。

■現況道の状況分類

○軽トラ程度が通れる車道（奥の谷）

奥の谷は現在も耕作が行なわれているので、軽トラが通れる程度の簡易舗装の車道が初芝高校近くまで通っている。

耕作者のほか、一般のハイカーの通行や、里山保全活動の作業など利用頻度は高い。

縁石や法面などのコンクリート構造物がないため、奥の谷の農地景観にあまりインパクトを与えず景観的に良好な状態を保っている。

○軽トラ程度が通れる車道

○踏み分け道

奥の谷の細かな谷沿い、及び南原との間の尾根上に踏み分け道が通っている。

谷から上がる道は、主にミカン園の手入れのためにつけられたもので、途中で行き止まりになっている箇所が多い。また、南原との間の尾根上の踏み分け道は、1997年の大阪国体の競技用に、草刈り等の整備が行なわれた。

○踏み分け道

○通行困難な踏み分け道

南原には耕作が行なわれていた当時の畦道が踏み分け道として残っているが、現在はほとんど使われていないため薮に覆われつつあり、通行が困難な状態である。

また奥の谷から南原にぬける道として、前述の大阪国体の際に開かれた道があり、観察会等にも利用しているが、南原側の斜面が急峻な崖地であるため、通行には注意を要する。

○通行困難な踏み分け道

○通行不可能な箇所

自然観察路としての利用を検討するため、現在は道がなく通行不可能な箇所の踏査も行なった。ほとんどがクズやノイバラ、ササなどの薮になっているため、人力で整備するにはかなりの労力を必要とするが、最小限の道を開くことで奥の谷と南原との周回コースを設定することが可能になる。

○通行不可能な箇所

■自然観察の資源

奥の谷の里山管理地や、南原の湿地・草地などが自然観察の主な対象となるが、それ以外にもモデル地区内には次のような資源がある。

○見晴らし良好な展望地

奥の谷と南原を分ける尾根の突端部は、滝谷不動尊の仏塔や金剛・葛城山系を見晴らすことができる良好な展望地となっている。現在は道が通っておらず通行不可能な薮になっているが、数十mを整備できれば既存の踏み分け道とむすぶことができる。

○滝谷不動尊に関連する石塔

南原の谷の最奥部には、滝谷不動尊に関連すると思われる石塔がある。由来については今後調査する必要があるが、この地の歴史文化的な経緯をさぐる上で大事な史跡と考えられる。

南原の耕作放棄に伴って、現在はここに通じる明瞭な道がない状況にあるが、南原の道を整備すれば容易に到達することができる。

○奥の谷古墳群

奥の谷の西側尾根部には「奥ノ谷古墳群」があり、3基の古墳の存在が明らかになっている。そのうちの1号墳については1983年に教育委員会による試掘調査が行なわれ、次のようなことがわかっている。（大阪府教育委員会「奥ノ谷古墳発掘調査概要」より）

・長径20m、短径14.5m、墳高2mの楕円形墳丘をもつ。
・木棺直葬の埋蔵施設と須恵器製の杯と蓋が出土。
・7世紀代の古墳で、従来に見られない立地にある。

古墳群の場所は、里山管理地の「NICEな森2003」の上部にあたっているため、今後は史跡を壊さないような配慮とともに、自然観察路の一環としての資源活用を行なうことで、より魅力的な観察ルートを設定することができる。

②自然観察路のコース設定（案）

現況道の踏査結果から、自然観察路のコースとしては、次のようなルート設定が考えられる。ルート設定においては、モデル地区を訪れた人が体力や時間にあわせてスムーズに自然観察を行なえるよう、複数の周回コースを設けた。また、コースごとに観察する対象の特色をもたせるように留意した（図「自然観察路コース(案)」参照)。

ただし、これらの自然観察路の設定にあたっては、土地所有者の了解を得て整備と管理を行なう必要がある。

■周回コースＡ　～雑木林を巡る道～

里山保全活動で手入れされた明るい雑木林を巡るコース。また最短距離で、奥の谷の見所（水の生きもの池～草地管理地～活動拠点～果樹の丘～雑木林～ツツジの尾根～展望地）をまわることの出来る道でもある。

■周回コースＢ　～NICE な森を巡る道～

国際ワークキャンプで整備したNICE な森を巡るコース。2000 年から始まった人工林の管理地について、林分ごとの下層植生の違いや年度ごとの植生変化を観察しながら散策することが出来る。

■奥の谷・南原一周コース

地区全体を一周して奥の谷と南原の概要をつかむコース。もっとも長距離のルートだが、季節を選べば、奥の谷のツリガネニンジンや、南原のササユリなど様々な植物をそれぞれの環境を比較しながら観察することが出来る。

■史跡コース

奥ノ谷古墳群の史跡をたどるコース。NICE な森の管理とあわせて整備を行い、初芝高校に至る車道と連絡することで、将来的には周辺地域の他の古墳群へとつなぐ史跡のネットワークルートとすることも考えられる。

■補助コース

長距離の奥の谷・南原一周コースからのエスケープルートとして、また周回コースＡ・Ｂからの延長ルートとして設定し、各ルートの自由度を高める。奥の谷の尾根上と南原の谷部を直接結ぶルートは、安全性を高めるための階段等の整備が必要である。

2.「奥の谷花ごよみ」の作成

モデル地区周辺で見られる春から初夏にかけての代表的な草花の写真や情報を、今後の里山保全活動や自然観察会、市民へのＰＲ等に活用できるよう、「奥の谷花ごよみ」としてまとめた。草花のピックアップに際しては、「嶽山の植物」（富田林の自然を守る会「富田林の自然№ 6」1999 年 2 月 21 日発行）を参考とした。

「奥の谷花ごよみ　春・初夏編」掲載種一覧

春 -1　カンサイタンポポ
春 -2　セイヨウタンポポ
春 -3　ナズナ（ペンペングサ）
春 -4　オランダミミナグサ
春 -5　ミミナグサ
春 -6　オオイヌノフグリ
春 -7　コハコベ
春 -8　ウシハコベ
春 -8　ヒメオドリコソウ
春 -10　ホトケノザ
春 -11　タネツケバナ
春 -12　フキ
春 -13　スギナ（ツクシ）
春 -14　スズメノヤリ
春 -15　カラスノエンドウ
春 -16　タチツボスミレ
春 -17　シハイスミレ
春 -18　ショウジョウバカマ
春 -19　シュンラン
春 -20　ヒメウズ
春 -21　ヘビイチゴ
春 -22　ミツバツチグリ
春 -23　イワニガナ（ジシバリ）
春 -24　オオジシバリ
春 -25　オニタビラコ
春 -26　キランソウ
春 -27　ゲンゲ（レンゲソウ）
春 -28　オニノゲシ
春 -29　ウマノアシガタ
春 -30　アメリカフウロ
春 -31　カサスゲ
春 -32　キュウリグサ
春 -33　スイバ（スカンポ）
春 -34　カタバミ
春 -35　スズメノエンドウ
春 -36　シャガ
春 -37　コメツブツメクサ
春 -38　シロツメグサ
春 -39　スズメノテッポウ
春 -40　ツボミオオバコ
春 -41　チチコグサ
春 -42　ハハコグサ
春 -43　ニガナ
春 -44　ムラサキサギゴケ
春 -45　ヤエムグラ
春 -46　ヤブジラミ

初夏 -1　オオバコ
初夏 -2　オヘビイチゴ
初夏 -3　ギシギシ
初夏 -4　タツナミソウ
初夏 -5　ドクダミ
初夏 -6　ニワゼキショウ
初夏 -7　ノビル
初夏 -8　ハルジオン
初夏 -9　ヒメジョオン
初夏 -10　ブタナ
初夏 -11　ムラサキカタバミ
初夏 -12　ヨウシュヤマゴボウ
初夏 -13　アキノエノコログサ
初夏 -14　エノコログサ
初夏 -15　アレチハナガサ
初夏 -16　ヒメコバンソウ
初夏 -17　ウツボグサ
初夏 -18　オカトラノオ
初夏 -19　ヌマトラノオ
初夏 -20　オヤブジラミ
初夏 -21　ガマ
初夏 -22　カワラナデシコ
初夏 -23　クサイ
初夏 -24　ササユリ
初夏 -25　コクラン
初夏 -26　カゼクサ
初夏 -27　チガヤ
初夏 -28　チチコグサモドキ
初夏 -29　トウバナ
初夏 -30　トキワハゼ
初夏 -31　キツネアザミ
初夏 -32　ノアザミ
初夏 -33　スズメノヒエ
初夏 -34　ノボロギク
初夏 -35　ベニバナボロギク
初夏 -36　ネジバナ
初夏 -37　ホタルブクロ
初夏 -38　ヤブガラシ
初夏 -39　ワルナスビ

●参考図書：　東海大学出版会「フィールド図鑑」
　　保育社「カラー自然ガイド」
●写真提供：　田渕武夫、寺川裕子
　（その他は宮城教育大学onLINE植物アルバムより）
　http://plant.csr.miyakyo-u.ac.jp/index.html

（１）春の花

№	種名	科名	原産	1～2年草 or多年草	奥の谷周辺での開花月
春-1	カンサイタンポポ	キク科	在来種	多年草	1-5,9,12
photo by Tabuti		高さ10～20cmほど。関西（近畿地方以西）に多いタンポポなのでこの名がある。全体に小柄で総ほう（花の下の部分）が反り返らず突起も無いのが特徴。花期は2～5月。			
春-2	セイヨウタンポポ	キク科	ヨーロッパ	多年草	1-12
		高さ20～30cm。花は早春から咲きはじめ、9～11月にも開花する。総包片は反り返り、単位生殖を行なう。欧州の原産で日本全土に帰化。都会地の空地、路傍などに多い。葉は食用となる。			
春-3	ナズナ（ペンペングサ）	アブラナ科	在来種	2年草	
photo by Tabuti		高さ0～50cm。2～4月、中心より茎を出して伸長する。茎葉は互生。花は総状につき、白色小花をつける。果実は三角形で20個ほどの種子がある。広く日本全土に分布し、畑地、空地、路傍、乾田などごく普通に生育する。春の七草の一つ。和名：「撫菜（ナデナ）」と書き、小形の草姿からきたといわれる。別名のぺんぺん草は果実が三味線のバチに似ることから。			
春-4	オランダミミナグサ	ナデシコ科	ヨーロッパ	2年草	2-4
photo by Tabuti		高さ20cmほど。全草に毛が密生する。葉は対生。開花は3～5月。白色の小花を密につけ、花柄はごく短い。花弁5個。欧州原産の帰化植物で本州以南の畑地、空地に群生する。和名：「和蘭耳菜草」			
春-5	ミミナグサ	ナデシコ科	在来種	2年草	2-5
		高さ20cmほど。葉は暗紫色をおびる。4～5月開花。花弁5個で、先端2裂する。花柄は長い。日本原産で全国に分布し、畑地、荒地に生える。			

№	種名	科名	原産	1～2年草 or多年草	奥の谷周辺での開花月
春-6	オオイヌノフグリ	ゴマノハグサ科	ヨーロッパ	2年草	2-5
photo by Tabuti		高さ20cmほど。葉は下部で対生、上部は互生となる。花期は3～4月、暖地では12月から咲きはじめ、早春の花として親しまれる。花は日をうけて咲く。花冠は4裂し、碧青色で濃い色の線条がある。欧州原産で明治初年頃に帰化。日本全土に広く分布し、畑、路傍などに生育する。和名：犬のフグリ（陰のう）で果実の形に基づく。			
春-7	コハコベ	ナデシコ科	在来種	1～2年草	2-5, 11-12
		高さ10～20cm。花は3～4月頃咲き白色、5弁で先端凹む。全土に分布し、畑地、空地にごく普通。和名：ハクベラ（古名）から転化。			
春-8	ウシハコベ	ナデシコ科	在来種	多年草	3-12
		高さ20cmほど。葉はやや紫色をおび、対生、葉面は少し波うつ。開花は5月。5花弁で花柱は5裂する。日本全土に分布し、畑地のへり、荒地、路傍に生える。和名：牛ハコベの意で大型なため。			
春-8	ヒメオドリコソウ	シソ科	ヨーロッパ	2年草	2-4
photo by Tabuti		高さ30～40cm。茎は四角形。葉は十字に対生し、上部の包葉は接してつき、紫紅色をおびる。開花は3～4月。花は茎の頂部に集まり、赤紫色の唇形花を輪状につける。6月頃全草が枯れる。欧州原産の帰化植物で本州に分布し、おもに都会地の路傍、畑地などのやわらかい土壌上に生育する。			
春-10	ホトケノザ	シソ科	在来種	2年草	3-4,11
photo by Tabuti		高さ20cmほど。茎は四角形。葉は対生し、下部の葉柄は著しく長いが、上方の葉は半円形で茎をとりまく。3～5月、紅紫色の唇形花をつけ美しい。本州、四国、九州、沖縄に広く分布し、畑地、路傍などに群生する。和名：「仏の座」と書き、初めに出る円い葉を仏の蓮華座にみたてたことによる。			

№	種名	科名	原産	1～2年草 or多年草	奥の谷周辺での開花月
春-11	タネツケバナ	アブラナ科	在来種	2年草	3-4
photo by Tabuti		高さ20cmほど。3～5月開花。花は白色、花弁4個。果実は細長く、熟すと果皮が裂け、反転して種子を飛ばす。日本全土に分布し、春の水田雑草としてごく普通に生える。特に湿田に見られる。乾燥地に生えるものは毛が多く、タチタネツケバナといって区別する。和名：「種漬花」と書き、稲籾を水につけるころ開花することからつけられた。			
春-12	フキ	キク科	在来種	多年草	3
photo by Tabuti		早春フキノトウを出して頭花をつける。雌雄異株。雌株にできる筒状花はたいへん細い。雄株には両性花ができるが、実はできない。花がすむと地下茎の先から普通の葉が出てくる。花期は3～5月。北海道や東北地方には、非常に大きくなるアキタブキがある。			
春-13	スギナ（ツクシ）	トクサ科	在来種	多年草	
photo by Tabuti		高さ20cmほど。胞子葉（つくし）は早春出穂し、先端部に胞子穂をつける。栄養茎はつくしの後に伸長し、茎は中空で縦にみぞが4本あり、輪生状に枝を分ける。地下茎は地中を長くはい、所々に小塊がある。沖縄を除く全土に広く分布し、路傍、荒地、畑地、放棄水田などいたるところに生育する。酸性指標植物の一つ。和名：「杉菜」で葉形に基づく。			
春-14	スズメノヤリ	イグサ科	在来種	多年草	3-5
		高さ20cmほど。葉のへりに白毛がある。花序は1個、赤褐色で頭状に密集する。平地から山地の芝地に生える。			
春-15	カラスノエンドウ	マメ科	在来種	2年草	3-5
photo by Tabuti		高さ60cmほどのつる性の越年草。葉は互生、複葉で先端は巻きひげとなる。開花は4～6月。花は紅紫色の蝶形花。果実は扁平、熟して黒色となり、裂開して種子をはじく。本州から吸収にかけて広く分布し、路傍、空地、土手などにごくふつうに生える。			

№	種名	科名	原産	1～2年草 or多年草	奥の谷周辺での開花月
春-16	タチツボスミレ	スミレ科	在来種	多年草	3-4
photo by Tabuti		高さ20cmほど。葉は地ぎわから出て長い柄があり、くしの歯状の托葉が目立つ。4～5月、淡紫色の花をつけ美しい。花弁5個、唇形となり、唇弁の後に距がある。葉形、花色などきわめて変化に富み、多数の変種や品種が記録されている。広く全土に分布し、二次林や林縁に生え、時に群生する。関西地方には葉の長いナガバタチツボスミレが分布する。			
春-17	シハイスミレ	スミレ科	在来種	多年草	
photo by Tabuti		葉は長めの卵型で幅1～2cm。裏は紫色である。花は濃い紅紫色で花期は4～5月。距は細長く長さ5～7mm。長野県から西の本州、四国、九州に分布。			
春-18	ショウジョウバカマ	ユリ科	在来種	多年草	
photo by Tabuti		高さ20cmほどの常緑多年草。葉は地に接して多数叢生し、光沢がある。旧葉の先端は地につくと新苗をつくる。4月、太い花茎植えに淡紅色の花をつけ美しい。花後、花茎は30～40cmに伸長する。北海道～九州の低地から高山までに分布し、林内、林縁、都木に湿原内にも生える。和名：「猩々袴」と書き、紅入りの花を猩々の顔に、葉を袴にたとえたといわれる。			
春-19	シュンラン	ラン科	在来種	多年草	
photo by Tabuti		高さ20cmほどの常緑多年草。葉は叢生し細長くてかたい。4月、花茎の先端に1花をつける。花被片は淡黄緑色でほぼ同形。唇弁に美に紫色の斑点がある。本州～九州に分布し、林内に生え、観賞用に栽培される。和名：「春蘭」			
春-20	ヒメウズ	キンポウゲ科	在来種	多年草	3-5
photo by Tabuti		高さ20～30cmで茎は細い。葉はやわらかくて下面が白く、3小葉に分かれ、各小葉はさらに深く分裂する。花は小さく、径4.5mmほど。がく片は白色でわずかにピンクにそまる。関東以西に分布。和名：「姫烏頭」			

№	種名	科名	原産	1～2年草 or多年草	奥の谷周辺での開花月
春-21	ヘビイチゴ	バラ科	在来種	多年草	3-4,9, (実11)
		地表をほふくする多年草。葉は互生、3小葉で長さ2～3cm。4～6月に黄色い花をつける。　果実は球形、径約1cm。九州以北に分布し、水田畦などに生える。	ヘビイチゴの実		
春-22	ミツバツチグリ	バラ科	在来種	多年草	
photo by Tabuti		高さ20cmほど。葉は3出複葉。開花は4～6月。花弁5個は先端が凹む。花後に匐枝を出して新苗をつくる。北海道～九州に分布し、芝地、草原に普通に生える。			
春-23	イワニガナ (ジシバリ)	キク科	在来種	多年草	4
		地に接して広がる多年草。葉は卵形で長い柄がある。4～7月、黄色の頭状花をつける。そう果に白い冠毛がつき、風で飛び散る。全土に分布し、山地の崩壊地に生え、時に低地にも生育する。別名は「地縛り」の意。			
春-24	オオジシバリ	キク科	在来種	多年草	4
		ほふくする多年草。茎は地中を浅く、または地表面をはい、節から発根する。葉は互生し、長い柄があって直立する。4～6月、高さ10～20cmの花茎を出し、直径3cmほどの黄色の頭状花をつける。果実は白色の冠毛があり、風で飛び散る。広く日本全土に分布し、水田畦に多くはえる。			
春-25	オニタビラコ	キク科	在来種	多年草	4-5
		高さ30～80cm。根生葉は羽状で有毛、褐紫色をおびる。茎は直立。5～6月、茎の先端に舌状花だけの頭状花を集める。広く日本全土に分布し、空地、生垣のへり、樹園地などにごく普通に生える。和名：「鬼田平子」			

№	種名	科名	原産	1～2年草 or多年草	奥の谷周辺での開花月
春-26	キランソウ	シソ科	在来種	多年草	4
photo by Tabuti		高さ2～5cmの小形の多年草。全体に縮れた毛がある。葉はロゼット状。茎の葉は対生し、上部は接してつき、濃緑色で紫色をおびる。開花は3～5月、花は葉の付け根に集まる。花冠は唇形状で紫色をおび、濃い色のすじがある。本州から九州にかけて分布し、路傍、林縁などに小群状に生える。別名にジゴクノカマノフタがあり、地面に接して広がる様子を見立てた。			
春-27	ゲンゲ (レンゲソウ)	マメ科	中国	2年草	4
photo by Tabuti		高さ15～25cm。葉は9～11個の小葉よりなり、長い柄の先に紅紫色の花がかたまって咲く。果実は熟せば真っ黒になる。中国原産。緑肥に用いられる。			
春-28	オニノゲシ	キク科	ヨーロッパ	2年草	4,11
		高さ1m内外に達する。茎は直立し、中空。葉は互生、表面に光沢あり、へりに鋭い鋸葉がある。基部は耳状とならない。開花は4～5月、ときに9～10月にも咲く。欧州原産で明治時代に帰化し、全国に分布している。畑地、空地などに生える。和名：「鬼野ゲシ」で、鋭いとげの密生する様子に基づく。			
春-29	ウマノアシガタ	キンポウゲ科	在来種	多年草	4-6
photo by Tabuti		高さ40～60cm。全草に開出する毛がある。4～6月に黄色い花をつける。花弁は5個、黄色でつやがある。北海道以南に分布し、日のあたる土手や水田の畦などに群生する。和名：「馬の脚形」と書き、根生葉が馬の脚の形に似ることから。			
春-30	アメリカフウロ	フウロソウ科	北アメリカ	1年草	4-6,9
photo by Tabuti		ゲンノショウコに似るが、葉は基部ちかくまで深く5～7裂、葉や葉柄の毛は細かくてまるで粉のように見え、花は径8mmほどで淡紅色。花期は春～秋。	色の濃い種類？		

№	種名	科名	原産	1～2年草 or多年草	奥の谷周辺での開花月
春-31	カサスゲ	カヤツリグサ科	在来種	多年草	4
photo by Tabuti		高さ80cmほど。5～6月、茎の先端に雄花穂をつけ、その舌に雌花穂が数個つく。雌花穂は長さ約10cm、りん片は紫褐色。北海道～九州に分布し、低地の湿原や流水辺に群落をつくる。和名：「笠スゲ」スゲ笠をつくるため。			
春-32	キュウリグサ	ムラサキ科	在来種	多年草	4-5
photo by Tabuti		高さ10～30cm。葉は互生。4～5月頃開花。花穂は先が渦巻き状で開花とともに長く伸びる。花は淡あい色。全土に分布し、畑地に生える。和名：葉をもむとキュウリの香りがある。			
春-33	スイバ（スカンポ）	タデ科	在来種	多年草	4-5
		高さ50～80cm。葉は互生、やじり形。5～6月茎の上方に円すい状に細花を輪生する。雌雄異株。雌花には赤色の3花柱がある。地下茎は黄色。日本全土の低地帯に分布し、路傍、土手、水田の畦などに普通に生える。酸性土壌の指標植物である。和名：「酸葉」の意で葉茎にシュウ酸を含み、酸味があるため。			
春-34	カタバミ	カタバミ科	在来種	多年草	4-10
photo by Tabuti		高さ20cmほど。茎は地上をはい、節から発根する。葉は互生し、柄が長く、托葉がある。果実は熟すと種子をはじき出す。全体が赤紫色のものをアカカタバミといい都会地に多い。日本全土に分布し、畑地、空地、路傍などにごく普通。和名：「傍食」と書き、葉の片側が欠けていることによる。			
春-35	スズメノエンドウ	マメ科	在来種	多年草	4-6
photo by Tabuti		高さ30～60cmのつる性の越年草。葉は互生し羽状複葉で小葉は6～8対あり、先端は巻きひげとなる。4～5月、繊細な長い花梗を出し、2～4個の蝶形花をつける。花は淡青紫色。本州以南に分布し、路傍、土手などに生える。和名：「雀野豌豆」と書く。			

№	種名	科名	原産	1～2年草 or多年草	奥の谷周辺での開花月
春-36	シャガ	アヤメ科	在来種	多年草	4
		高さ50cmほど。葉は上面が内側に折りたたまれ、さらに一方に傾く。4～5月に淡青色の花をつける。長い地下茎を伸ばして群落となる。本州～九州に分布し、古く中国から伝わったものといわれる。和名：ヒオウギの漢名「射干」から。			
春-37	コメツブツメクサ	マメ科	ヨーロッパ	1年草	4-6
		地に接して広がる1年草。小葉は3個、中央の小葉だけ柄がある。花は黄色で長さ3mm、10個あまりずつ集まってつき、花がすんだあとも花弁は淡褐色になりながら果実を包む。牧場や道ばたに帰化。			
春-38	シロツメグサ	マメ科	ヨーロッパ	多年草	4-11
photo by Tabuti		高さ20～30cm。茎は地上をはい、節から根を出す。葉は互生、長い柄で直立し、3小葉からなる。小葉は夜に上を向いて閉じる。4～6月、花茎を立てて白色の蝶形花を球状に集めて咲く。花の寿命が長い。江戸時代に帰化、また牧草として導入され、各地に野生化している。和名：「白詰草」で、ツメクサはこの草がかつて容器を運ぶ際の詰め物として利用されたことによる。			
春-39	スズメノテッポウ	イネ科	在来種	2年草	4-6
		高さ20～30cm。多数の小穂を密着する。葯は黄褐色。全国に分布し、春の水田雑草の代表種である。畑地に生えるタイプも知られている。和名：「雀ノ鉄砲」は花穂を小形の鉄砲に見立てた。			
春-40	ツボミオオバコ	オオバコ科	北アメリカ	1～2年草	4-5
		高さ10～30cmの花茎を延ばし，小さな花を穂状につける。花期は5月～7月。花茎ともに全面に白色の曲がった毛が密生し，ふわふわしている。1913年、愛知県岡崎で発見され、関東地方以西の道端や荒れ地などに広く帰化している。花冠がほとんど開かないので、いつまでもつぼみのように見えることからついた名。和名：「蕾大葉子」			

№	種名	科名	原産	1～2年草 or多年草	奥の谷周辺での開花月
春-41	チチコグサ	キク科	在来種	多年草	4-6
		高さ20cmほど。茎や葉の下面に白色の綿毛がある。5～10月開花。頭状花を密につける。果実に冠毛がある。本州以西に分布し、乾いたやせた草地に生える。和名:「父子草」で「母子草」に対してつけられた。			
春-42	ハハコグサ	キク科	在来種	2年草	4-9
photo by Tabuti		高さ20cmほど。全草にやわらかい白毛がある。葉は互生、へりは少し波をうち、葉柄に狭い翼がある。4～6月、ときに11月頃、茎の先端に頭状花を密につけ1つの花に見える。頭花の周辺は雄花、中心部は両性花。広く日本全土に分布し、畑地、空地、沼のへりなど湿った裸地に生える。春の七草のオギョウ「御形」。和名:「母子草」と書き、冠毛がほおけ立つ様子から由来したといわ			
春-43	ニガナ	キク科	在来種	多年草	4-6
photo by Tabuti		高さ30cmほど。根生葉は羽状に裂け、長い柄がある。茎葉は耳状に茎をだく。5～7月、黄色の花を日中に咲かせる。日本全土に分布し、ススキ草原を中心にごく普通に生える。和名:「苦菜」は茎葉が苦味のある白い乳液を含むため。			
春-44	ムラサキサギゴケ	ゴマノハグサ科	在来種	多年草	4-5
photo by Tabuti		地面に接して生育する多年草。開花は4～5月、5cm内外の花茎に紅紫色の唇形花をつける。下唇は大きく、3裂して2個の突起がある。雌ずいはふたまたに分かれ、触れるとすぐに閉じる。白花品種をサギシバとよび、地方によってはこの品種のみ生える。本州から九州にかけて分布し、湿った草地に生え、特に水田畦に群落をつくる。和名:「紫鷺苔」の意。			
春-45	ヤエムグラ	アカネ科	在来種	2年草	4-6
		高さ60cmほど。茎には逆向きの棘がある。4～5月、茎の先端に淡黄緑色の小形の花をつける。果実は表面にかぎ状の毛があり、他物に付着する。初夏には枯れる。広く日本全土に分布し、畑地、路傍、林縁、疎林内に生え、群生する。和名:「八重葎」と書き、幾重にも重なって生えるようすから。			

№	種名	科名	原産	1～2年草 or多年草	奥の谷周辺での開花月
春-46	ヤブジラミ	セリ科	在来種	2年草	4-5
		高さ60cmほど。開花は6～7月、小白花を多数つける。果実は短い柄で球状に集まり、棘状の毛を密生し、動物について運ばれる。日本全土に分布し、林縁に生える。和名:「薮虱」			

（２）初夏の花

№	種名	科名	原産	1～2年草 or多年草	奥の谷周辺での開花月
初夏-1	オオバコ	オオバコ科	在来種	多年草	5-11
photo by Tabuti		高さ10～20cmほど。6～7月および9～10月に直立する穂を出し、多数の花をつけ、下から順に咲き上がる。種子は水にぬれると粘液を出し、動物や人間の靴について運ばれる。広く日本全土に分布し、路傍、グラウンド、空地など、踏みつけの強いところに生える。和名：「大葉子」と書き、葉の広いことからきた。			
初夏-2	オヘビイチゴ	バラ科	在来種	多年草	5
		ヘビイチゴに似るが、花数が多く、下の葉は5小葉、花托は赤くならない。			
初夏-3	ギシギシ	タデ科	在来種	多年草	5,12
		高さ60～100cmほど。花期は6～7月、直立した太い茎の上部に淡緑の小花を多数輪生状につける。日本全土の低地に広く分布し、田の畦、川岸など湿った富栄養地に群生する。類似種のナガバギシギシは葉が細く、へりが強く波をうつ。			
初夏-4	タツナミソウ	シソ科	在来種	多年草	5
photo by Tabuti		高さ30cmほど。茎は直立し、開出毛がある。葉は対生しほぼ同大。5～6月、紫色の唇形花を穂状に集めて咲く。本州以西に分布し、山道沿いに生える。和名：「立浪草」と書き、花が泡立つ波に似るため。似た仲間が多い。			
初夏-5	ドクダミ	ドクダミ科	在来種	多年草	5-6
photo by Tabuti		高さ20～40cm。全草紫色をおび、ふれると悪臭を放つ。葉は互生し、心臓形。6～8月、葉に相対して花穂を出す。一つの花に見えるのは花序で、白色花弁状のものは包葉（総包片）で、中心の穂は小花の集まりである。地下茎は長く横走する。日本全土に分布し、人家周辺、溝、林縁、疎林内に群生する。和名：「毒痛み」の意とする説がある。地下茎を薬用とする。別名ジュウヤク			

№	種名	科名	原産	1～2年草 or多年草	奥の谷周辺での開花月
初夏-6	ニワゼキショウ	アヤメ科	北アメリカ	多年草	5-6
photo by Tabuti		高さ10～20cm。4～6月に開花、一日でしぼむ。淡紫色で、ときに白色で紫のすじのある個体がある。北米原産で明治20年頃、観賞用に導入したものが逸出し、現在、日のあたる路傍、空地に群生する。和名：「庭石昌」と書き、セキショウに似ることから。			
初夏-7	ノビル	ユリ科	在来種	多年草	
photo by Tabuti		高さ30～60cm。葉は秋から地表にあらわれ、花は微紅色で5～6月開花。鱗茎はやや球型で夏に多くの球茎ができて新苗となる。広く日本全土に分布し、畑地、土手、都木に疎林内にも生える。史前帰化植物といわれる。和名：「野蒜」と書き、野に生えるヒル（ネギ類）の意。根は食用となる。			
初夏-8	ハルジオン	キク科	北アメリカ	多年草	5
		高さ60cmほど。茎は直立し、あらい毛があり中空。開花は4～5月。茎の頂端に淡紅色～白色の頭状花をつける。つぼみは下垂し、紅色。北米原産の帰化植物で関東地方に分布し、都会地の空地、植え込みなどに群生する。種子で繁殖するほか、地下茎でも増える。和名：「春紫苑」と書き、春咲くシオンの意。			
初夏-9	ヒメジョオン	キク科	北アメリカ	1～2年草	5-12
photo by Tabuti		高さ80cmほど。茎は直立し、中実。開花は6～7月でハルジオンより遅い。茎頂に白色の頭状花をつける。北米原産の帰化植物で日本全土に分布し、畑地、空地に多く、特に耕作を停止した畑地に群生する。和名：「姫女苑」。似た種類にヘラバヒメジョオンがあり、葉はへら形、山地に侵入している。			
初夏-10	ブタナ	キク科	ヨーロッパ	多年草	5-9
photo by Tabuti		高さ60～80cmほど。5～6月、少数分枝した花茎を叢生し、タンポポに似た黄色花をつける。花は朝開いて午後にはしぼむ。ヨーロッパ原産の帰化植物で、わが国への最初の記録は1934年。現在北海道、本州に分布し、特に北地に多い。荒地、埋立地など比較的やせた場所に生育し、ときに群生する。和名：ブタナはフランスの俗名Salade de porcに基づく。			

№	種名	科名	原産	1～2年草 or多年草	奥の谷周辺での開花月
初夏-11	ムラサキカタバミ	カタバミ科	南アメリカ	多年草	5-9
photo by Tabuti		高さ20cmほど。葉の柄は長く、有毛。5～6月開花し、淡紅色の5弁花をつける。南米原産の帰化植物で文久年間の渡来。関東以西に分布し、畑地、樹園地の強害草である。			
初夏-12	ヨウシュヤマゴボウ	ヤマゴボウ科	北アメリカ	多年草	5-9(実-11)
photo by Tabuti		高さ1～1.5mに達する大型の多年草。茎は太く、紅紫色をおびる。葉は互生し、やわらかい。8月、白色の小花をつけ、先端は下垂する。過日は漿果で紅紫色の汁を含む。種子は10個、根は直根で肥大する。北米原産で明治初年に帰化。別名アメリカヤマゴボウ。			
初夏-13	アキノエノコログサ	イネ科	在来種	1年草	6-11
		高さ50～100cmほど。葉は有毛、葉身が基部でねじれ、上面を下にして展開する。9～10月に出穂し、花穂はエノコログサよりも大きく、先端が垂れる。剛毛は緑色。広く日本全土に分布し、畑地、荒地にふつうに生え、特にゴミ堆積地、河辺肥沃地などではエノコログサより多い。和名：秋のエノコログサで、秋に出穂することによる。			
初夏-14	エノコログサ	イネ科	在来種	1年草	6-10
		高さ50～80cm。8～10月出穂。花は朝開き、葯が縮んで受粉を行う。剛毛は緑色。全国の畑地、荒地などに生える。和名：「狗の子草」で、穂を子犬の尾にみたてた。			
初夏-15	アレチハナガサ	クマツヅラ科	南アメリカ	多年草	6-11
		高さ1～2m。茎は著しくざらつき、切り口は方形。葉はあらい毛があってざらつき、へりには大小ふぞろいの深い歯がある。花は淡紫色。花期は夏。1957年頃に北九州市や神奈川県久里浜などで前後して採られている。			

№	種名	科名	原産	1～2年草 or多年草	奥の谷周辺での開花月
初夏-16	ヒメコバンソウ	イネ科	ヨーロッパ	1年草	5
		高さ10～60cm。無毛。花序は高さ4～15cmで多くの小穂がまばらにつく。小穂は4～8の小花よりなり、淡緑色ときに淡紫色を帯びやや光沢がある。幕末には日本に入っている。			
初夏-17	ウツボグサ	シソ科	在来種	多年草	6-8
photo by Tabuti		高さ10～30cm。茎は数本株立ちする。葉は対生。6～8月、筒状の花穂に紫色の唇形花をつけ美しい。広く日本全土に分布し、草原に生える。和名：「靫（ウツボ）草」で弓矢を入れるウツボの意。			
初夏-18	オカトラノオ	サクラソウ科	在来種	多年草	6
photo by Tabuti		高さ0.6～1m。茎は直立する。葉は互生し、葉をすかすと油点が見える。6～7月開花。花穂は白色花を密につけ、一方に傾く。花後、花穂は直立する。秋全体が紅葉し美しい。地下茎は長い。北海道～九州に分布し、日のあたる草原に多い。和名：「岡虎の尾」と書き、花穂が獣の尾に似ることによる。			
初夏-19	ヌマトラノオ	サクラソウ科	在来種	多年草	6～7
photo by Terakawa		高さ50cmほど。茎は円柱形で直立する。葉は互生し、基部に柄はない。7～8月、白色花を密につける。地下茎を長くひく。本州～九州に分布し、低地の失言に生える。和名：「沼虎の尾」			
初夏-20	オヤブジラミ	セリ科	在来種	2年草	6
		高さ60cmほど。ヤブジラミに似て全体に紫色をおび、開花は5月でやや早く、果実数は少なく、柄は少し長い。本州以南に分布。和名：「雄薮虱」			

№	種名	科名	原産	1～2年草 or多年草	奥の谷周辺での開花月
初夏-21	ガマ	ガマ科	在来種	多年草	6-9
photo by Terakawa		高さ1～2mに達する大型の抽水植物。葉はむち状で茎より高く伸びる。8～9月、直立した茎の先端に円柱状の花序をつける。果穂は赤褐色に熟し、果実の基部に白色の毛がつき、風で飛び散る。広く北海道～九州北部に分布し、低地の沼や池に群生する。花粉を蒲黄といい薬用とする。			
初夏-22	カワラナデシコ	ナデシコ科	在来種	多年草	6
		高さ40～80cm。全体が白味をおび少数の茎を立てて、細い葉を対生する。7～10月、淡紅色の美しい花をつける。花弁は5個で糸状にさける。本州～九州に分布し、河原や草原に生える。和名:「河原撫子」は可憐な草姿から。			
初夏-23	クサイ	イグサ科	在来種	多年草	6
		高さ30～60cm。6～9月開花。種子は湿ると粘液を出す。日本全土に分布する。和名:「草藺」と書き、役に立たないイの意。			
初夏-24	ササユリ	ユリ科	在来種	多年草	6
photo by Tabuti		高さ80cmほど。茎はまばらに互生し、細長くてササに似る。6～7月、淡紅色の美しい花を数個つける。花はろうと状で花被片はそりかえり、斑点はない。鱗茎は卵型で白い。本州中部から西、九州に分布し、草原や疎林内に点在する。和名:「笹百合」			
初夏-25	コクラン	ラン科	在来種	多年草	
photo by Tabuti		直立した茎を有し、花は夏で暗紫色。暖温帯の常緑林床。本州、四国、九州に分布する。			

№	種名	科名	原産	1～2年草 or多年草	奥の谷周辺での開花月
初夏-26	カゼクサ	イネ科	在来種	多年草	6,9-11
		高さ50cmほど。株は団塊状となる。葉に白色の肩毛がある。4～10月、多数の小穂をつける。小穂は6～7個の小花が集まり、紫色をおびる。本州～九州に分布、路上、空地などに生える。和名:「風草」。誤って類似種の知風草にあてたためといわれる。			
初夏-27	チガヤ	イネ科	在来種	多年草	6
photo by Tabuti		高30～60cm。群れをなして生える。葉は立ち、かたい。5～6月、花穂を出して円柱状の花弁をつける。穂には白色の毛が密につく。地下茎は細く白色で長く伸び、甘味がある。秋に株全体が紅葉する。広く日本全土に分布し、海岸や河岸の砂地に生え、湿地にも侵入する。和名:チなるカヤの意で、チは「千」で草が叢生することに基づく。地下茎は薬用。			
初夏-28	チチコグサモドキ	キク科	アメリカ大陸	1～2年草	6-11
		チチコグサに比べ葉の幅が広く、頭花の集まりは穂になってつき、冠毛は元で互いにくっついて果実から離れやすく、離れてもばらばらにならない。これに対し、ハハコグサやチチコグサの冠毛は元がくっついておらず、ばらばらになりやすい。			
初夏-29	トウバナ	シソ科	在来種	多年草	6-9
photo by Tabuti		高さ10～30cm。茎は切り口が四角形。小さな淡紅色の唇形花が段になってつき、がくは長さ3～4mmで、わずかに短毛がある。			
初夏-30	トキワハゼ	ゴマノハグサ科	在来種	1年草	6,9
		高さ10～15cm。ムラサキサギゴケに似るが匐枝を出さない。茎は2～3本直立する。花は総状に10個ほどつき、下方から咲きながら花茎も伸びる。きまった開花期はない。唇形花で下唇は上唇より大きく、2つの突起がある。分布は日本全土。休耕田、水田畦、ため池の岸、湿った庭先などにまばらに生える。和名:「常盤ハゼ」で年中開花することから。			

№	種名	科名	原産	1～2年草 or多年草	奥の谷周辺での開花月
初夏-31	キツネアザミ	キク科	在来種	2年草	
photo by Tabuti		高さ60～80cm。茎は直立し、中空。葉は互生、羽状に深裂し、下面に白毛が密生する。5～6月開花。頭花は筒状花のみで紅紫色。本州以南に分布し、春の水田に点在生育する。和名：「狐アザミ」でアザミに似ているが異なるのでキツネにだまされたように表現したもの。			
初夏-32	ノアザミ	キク科	在来種	多年草	6-11
photo by Tabuti		高さ60～80cm。全体が細毛でおおわれる。葉は互生し、羽状にさけ、上面に多細胞の毛がある。6～8月、紅紫色の頭状花をつける。総包片は直立し、ねばる。本州～九州に分布し、日のあたる草原に生える。和名：野に生えるアザミ、ドイツアザミとよぶ園芸改良品がある。			
初夏-33	スズメノヒエ	イネ科	在来種	多年草	6-11
		高さ40～90cm。花穂は3～5個。小穂の基部に長毛がある。和名：「雀の稗」			
初夏-34	ノボロギク	キク科	ヨーロッパ	1～2年草	6
		高さ30cmほど。全草やわらかい。茎は直立し、まばらに分枝して赤紫色をおびる。葉は互生、不規則に羽状に切れ込む。4～5月開花し、時に秋にも開く。頭状花は黄色で筒状花よりなる。欧州原産で明治初年に帰化し、全国に広く分布する。畑地に多い雑草で、ときに群生する。和名：野に生えるボロギク（サワギクの別名）の意。			
初夏-35	ベニバナボロギク	キク科	アフリカ	1年草	6-11
		高さ1mほど。全体やわらかい。茎は直立。葉は互生、不規則に羽裂する。7～9月開花。頭花は下向きに咲く。花は紅色。アフリカ原産で1950年頃帰化。関東地方以西に分布し、伐採跡地に群生する。			

№	種名	科名	原産	1～2年草 or多年草	奥の谷周辺での開花月
初夏-36	ネジバナ	ラン科	在来種	多年草	6
photo by Terakawa		高さ20cmほど。4～8月、花茎を直立し、ねじれた穂状の花序を出す。花は桃色。横向きに咲き美しい。唇弁のふちに鋸歯がある。根は多肉でぼうすい状。日本全土に分布し、シバやチガヤの草原に生える。和名：「捩し摺り」の意。			
初夏-37	ホタルブクロ	キキョウ科	在来種	多年草	6
photo by Tabuti		高さ30～60cm。幼苗は長い柄の葉をもち、スミレの仲間に似る。全草有毛で茎葉は互生。開花は6～8月。一茎に10個ほどつき、枝の頂端の花から咲きはじめる。花色は濃紫色から白色に近いものまで変異がある。花冠はつりがね状で先端部が5裂する。北海道から九州にかけて分布し、路傍、林縁、疎林内などに生える。和名：「蛍袋」の意で子どもがホタルを入れて遊ぶことによる。			
初夏-38	ヤブガラシ	ブドウ科	在来種	多年草	6-9
		つる性の多年草。茎はよく伸長して垣根などにまつわり、高さ3～4mに達する。茎の先端はつねに下を向く。葉は互生。7～8月に小形の花をつける。花盤は朱色、密を分泌し、チョウがよく飛来する。果実は紫黒色の漿果であるが結実はまれである。本州以南に広く分布し暖地ほど成育は旺盛で、路傍、林縁に繁茂し、強害草となる。和名：ヤブをも枯らす勢いで生育することから。			
初夏-39	ワルナスビ	ナス科	北アメリカ	多年草	6-8
		高さ50cmほど。茎は枝分かれし、鋭いとげがある。葉は互生し星状毛を密生する。開花は7～8月、白色～淡紫色の花を節間に数個つける。果実は球形、熟して黄褐色となる。北米原産で関東地方では畑地の強害草となっている。			

参考資料

○奥ノ谷古墳発掘調査概要（1985.3 大阪府教育委員会）

○嶽山の植物
富田林の自然を守る会「富田林の自然№ 6」（1999 年 2 月 21 日発行）より

奥ノ谷古墳発掘調査概要

第１章　調査に至る経過

富田林市の南部、石川の右岸に位置する伏見堂地区は、比較的広い面積をもつ河岸段丘面とその背後の丘陵よりなっている。この平坦面には５基の円・方墳よりなる西野々古墳群が存在し、丘陵斜面には田中、嶽山古墳群の約３０基の小型円墳が分布している。

学校法人初芝学園は、分校用地をこの地区の丘陵上に求め、富田林市に開発申請を提出した。予定地に近接して田中古墳群が分布し、この一帯にはさらに未発見の古墳の存在が予想されるため、１９８２年度に富田林市教育委員会社会教育課と本府教育委員会文化財保護課は合同で分布調査を実施したが、当該予定地には埋蔵文化財等の分布が認められなかった。そして今回分校予定地に至る進入路が当初の計画より大幅に変更されることとなり、その予定線上を1982年４月に前回同様富田林市教育委員会社会教育課、本府教育委員会文化財保護課合同で分布調査を実施し、埋蔵文化財の包蔵が予想される平坦地２ヶ所と古墳状隆起１ヶ所に調査区を設定した。

第１図　奥ノ谷１号墳の位置（Ｓ＝１／75000）

１９８３年５月～６月に富田林市教育委員会社会教育課、本府教育委員会文化財保護課が実施した試掘調査により、２ヶ所の平坦地には埋蔵文化財の所在は認められなかったものの、古墳状隆起の頂部よりは木棺直葬による主体部が検出され、７世紀初めに造営された円墳であることが確認された。この結果に基づき、学校法人初芝学園と協議を行い、本古墳を保護するため、進入路のルートを変更することで合意した。

本古墳は、一帯の字名「奥ノ谷」により命名し、本古墳を奥ノ谷１号墳とした。また奥ノ谷１号墳から北西に向って、尾根上に分布する古墳状隆起をそれぞれ奥ノ谷２号墳、奥ノ谷３号墳とする。奥ノ谷１号墳の地番は、富田林市彼方１７９６である。

試掘調査は、富田林市教育委員会 中辻 亘、本府教育委員会文化財保護課技師 小林義孝 が担当した。調査に当っては、井穴俊一、河内一浩、阪口文子、桜渕繁太郎、速水俊郎、溝端竹一、南庄一、政義昌俊、山本泉の諸氏の協力をえ、また主体部ならびに遺物の写真撮影は阿南辰秀氏にお願いした。

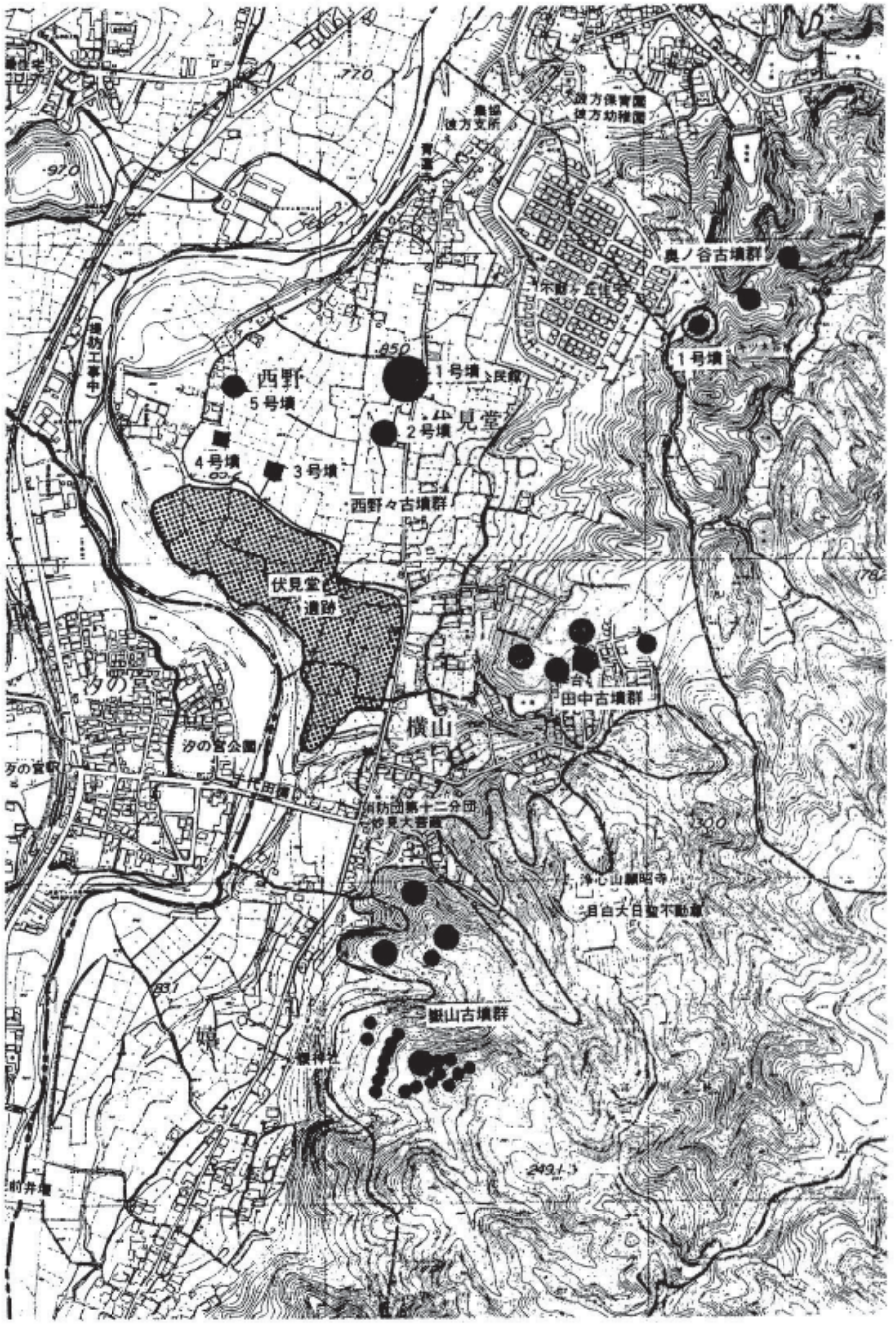
本書の作成に当たっては、遺物の実測、製図を阪口、速水が行い、本文の執筆、編集は中辻との協議をもとに、一部阪口の補助をうけ、小林がこれに当った。

第２章　奥ノ谷古墳群の周辺

奥ノ谷古墳が所在する石川中流域右岸の伏見堂地域は、三方を石川に、東方を嶽山からのびる丘陵地にかこまれた、おおよそ 500 *m* 四方の河岸段丘面上の平坦面に位置し、地形的に完結した環境を示している。この段丘平坦面と背後の丘陵には、約40基の後期古墳が分布しており、今回新規発見した奥ノ谷古墳群もその中のひとつである。

この地域に分布する古墳には、その立地する地点によって大きく２つに分類できる。一方は５基の大型円・方墳よりなる西野々古墳群（註1）であり、もう一方は丘陵斜面や尾根上に立地する小型の円墳よりなる田中古墳群、嶽山古墳群そして奥ノ谷古墳群の３つの群集墳である。

西野々古墳１号墳（明八塚古墳）は、西野々古墳群中最大の規模をもち、立



第２図　奥ノ谷古墳群とその周辺（Ｓ＝１／10000）

地点も最良の段丘面上の平坦地の中央部を占めている。直径約46 m、高さ約９ mを測る大型の円墳で、墳丘の周囲を幅約6.5 m、深さ約0.8 mの周濠が巡っている。内部主体は横穴式石室と考えられ、出土した円筒埴輪片によって６世紀前半の比較的新しい時期が与えられている。２号墳もやはり平坦面中央部に位置し、直径約25 m、高さ４ mの円墳であったことが推定されている。(註２) 内部主体は横穴式石室の可能性が高い。３号墳は、中央よりやや段丘崖よりの地点に位置し、１辺約28 m、高さ2.5 m以上を測る方墳である。４号墳は段丘縁辺に近く、１辺約15 m、高さ約４ mの方墳である。そしてさらに４号墳に近接して、字「松の木」にも１基の古墳がかつて存在したと伝えられている。

西野々古墳群を通観すると、段丘平坦面から段丘崖へ築造位置を移動させる(註３)につれて、規模を縮少していくことが確認できる。この古墳群の築造過程は、出土遺物もなく、明らかにすることはできないが、横穴式石室をもつ古墳時代後期の古墳群であり、丘陵から降りた平坦地の中に点々と分布する様相から考えて、この５基の古墳よりなる古墳群は、ひとつの造営主体により、約100年近い時間の中で、順次築造された可能性が高いと考えられる。そして１号墳ほどの規模をもつ古墳からは通例装飾付須恵器などを出土しており、この地域の最有力な集団によって形成されたものであろう。

丘陵上の３つの古墳群のうち、比較的段丘面上の平坦地に近い田中古墳群、嶽山の裾の急峻な傾斜面に築かれた嶽山古墳群、奥ノ谷古墳群とは、その内容にいくらかの差異が認められる。

５基の古墳よりなる田中古墳群は、１号墳から４号墳までが墳丘の直径を25～30 mも測り、その内部主体も、全長7.5～10.5 mという比較的大規模な横穴式石室を持っている。そして２号墳、３号墳の内部には凝灰岩製の家形石棺の残欠が残り、１号墳からは馬具とともに装飾付須恵器の破片も出土している。田中古墳群の造営時期は６世紀後半頃に求められる。このような田中古墳群の墳丘、横穴式石室の規模、副葬品の豊富さは、嶽山古墳群に比べて著しい差異が見い出せる。

嶽山古墳群は23基の円墳よりなり、１号墳、２号墳、３号墳、17号墳の４基は、田中古墳群と似た25 m前後の円形の墳丘をもつが、他は直径10 m前後

の小型の円墳である。そして大部分を占める小型の古墳の内部主体である横穴式石室も全長5 m前後の小型のものであり、著しく狭い地点に密集して造営されている。

伏見堂地域の西野々古墳群は、6世紀前半でも比較的新しい時期に築造を開始し、6世紀末から7世紀始めの時期まで、100年近い間に5基の古墳を順次造営していったものと考えられる。そして当初平坦地中央の最良の地点から、規模を縮少するに伴い、段丘の縁辺に移動していくのである。そして西野々古墳群に3～40年遅れて、6世紀後半には田中・嶽山の両古墳群が造営を開始する。この古墳群も2～3基をひとつの単位とする小支群に分けられ、田中古墳群が2つの造営主体、田中古墳群が10ほどの造営主体による5～60年の造墓活動によって、古墳群が形成されたものと考えられる。

また立地により、平坦地、比較的低い丘陵地、急峻な丘陵斜面と規模を縮少してゆき、急峻な丘陵斜面に立地する嶽山古墳群の中でも規模の大きなものは、尾根上の良好な地点を占めていることなど、伏見堂地域の古墳群の形成過程において、それぞれの造営主体の関係性が、古墳を規模とその築造地の立地に表現されているものと考えられる。

この地域に古墳を造営した集団の集落については未だ明らかでないが、西野々古墳群西側の段丘縁辺部には須恵器などが散布する伏見堂遺跡が存在し、彼らの集落跡がある可能性が高い。

また伏見堂地域の周辺をみると、対岸は「錦織氏」の本拠地と考えられる錦織・甲田地域であり古墳時代前期末の廿山古墳から7世紀後半の南坪池古墳に至る古墳群が形成されている。また北方の彼方・板持地域に分布する古墳群も、北東方の寛弘寺、西大寺山古墳群においても、古墳時代前期から後期に至る時期の古墳を造営しており、後期古墳のみよりなる伏見堂地域の古墳群と大きな差異がみられる。

（註1）　伏見堂地域の各古墳のあらましについては、『富田林市の埋蔵文化財』（富田林市教育委員会　1978年）によった。

（註2）　酒井龍一『明八塚周濠部試掘調査報告書』（（財）大阪文化財センター　1979年）

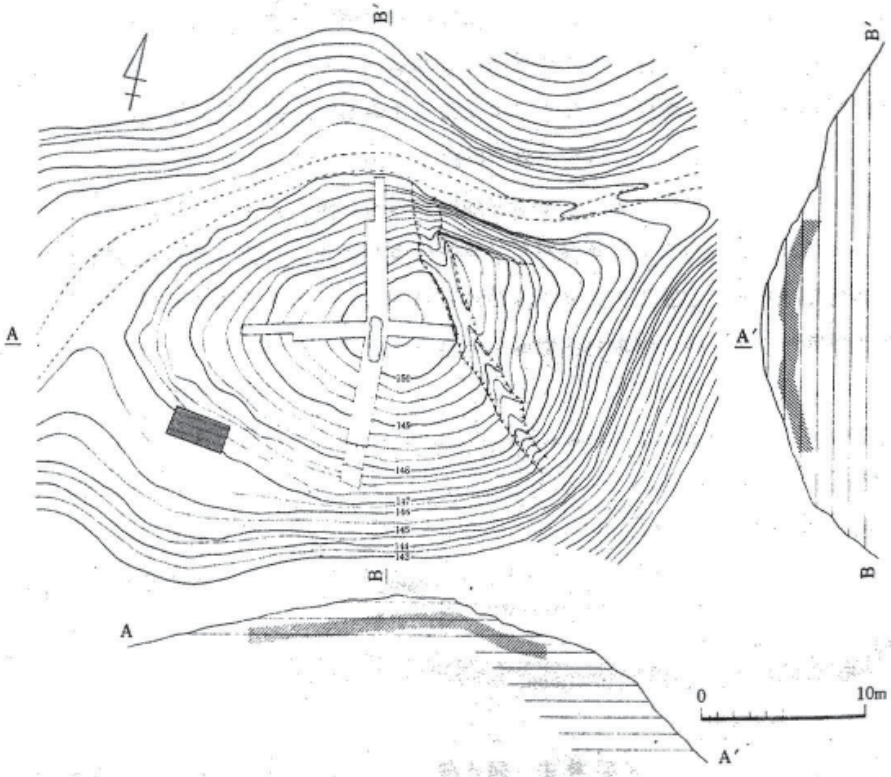
（註3）　堀田啓一『河内考古学散歩』（学生社　1975年）

第3章　調査の成果

1.　墳　丘（第3，4図、図版1）

奥ノ谷1号墳は、石川谷と滝谷不動明王寺より嶽山に向う谷にはさまれた尾根上に立地しており、眼下には伏見堂地区の河岸段丘面はもとより、石川の対岸、錦織・甲田地域に広く分布する集落跡、寺院跡、古墳群を眺望できる。

墳丘はやせた尾根上にみられる地形的な盛り上がりを利用して築造されている。この盛り上がりは、谷側において傾斜の変換もなくほぼ直線的に谷底へ向うが、尾根筋に当たる西と東では、急激にレベルを上げ、径約25 mを測る円形の高まりとなっている。現況の地形測量では、墳丘の範囲は限定できなかったが、墳



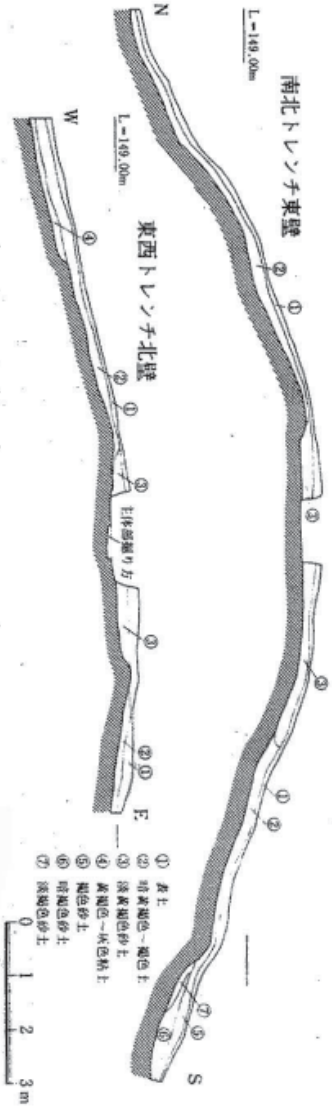
第3図　奥ノ谷1号墳墳丘実測図

丘のほぼ中央部に十字に設定したトレンチのうち、南北トレンチにおいては、墳丘の南と北の裾部を確認できた。南側では墳頂より約８ｍ、比高約２ｍを測る付近で地山面がカットされており、北側においても地山が傾斜を変換させている。

その結果にもとづいて墳丘規模を想定すると南北の差し渡しが約14.5ｍ、墳丘高が約２ｍとなる。そして南北の裾部を走るコンター・ラインを墳丘の東と西に追うと、西側では変化はみられないものの、東側では傾斜変換点付近に至り、このことから東西方向の直径は20ｍ近くを測るものと考えられる。現況で判断する限り奥ノ谷１号墳は長径約20ｍ、短径約14.5ｍ、墳高約２ｍを測る楕円形の墳丘が復元される。しかし東西の方向についてはトレンチが裾部に至っておらず、後世の盛土の流出によって裾部が広がってた可能性も否定できない。

トレンチにおける断面観察によれば、墳丘全体に厚さ約10㎝の表土が堆積しており、その下層には10～20㎝の厚さの暗黄褐色から褐色を呈す山土による土層が墳丘全域にみられた。南北トレンチにおいては、この暗黄褐色から褐色土層は、墳丘の裾部を越えて下層にまで広がるが、これは墳丘盛土の流出によるものであろう。東西トレンチの西端付近では、黄褐色から灰色を呈す粘土層がみられた。

墳頂部では、南北約６ｍ、東西約４ｍの規模で、盛土と一部地山を掘り込んだ落ち込みがみられ、淡黄褐色砂土が充満されていた。主体部の掘り方は、この落ち込み埋土を掘削して作られたものである。



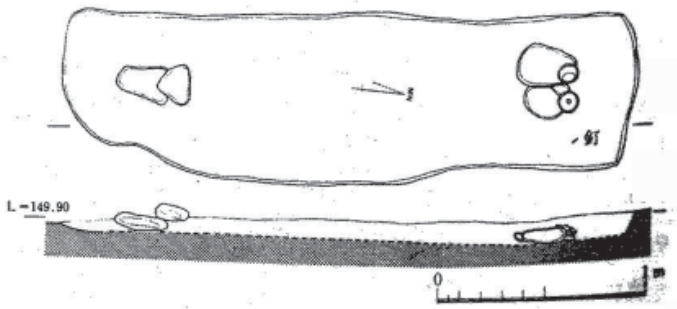
第４図　トレンチ断面図

奥ノ谷１号墳の墳丘は、自然地形の盛り上がりを利用し、裾部をカットして墳丘の範囲を決めて築造しており、築造当初からさほど高く盛土が施されていたとは考えられない。

2.　埋葬施設（第５図、図版２）

墳丘の中央部に、ほぼ南北に主軸をとる木棺直葬による主体部を検出した。墓壙は長さ約2.7ｍ、幅0.7～0.8ｍを測り、北側ではまるみを帯びるが、おおむね長方形を呈する。現地表面から墓壙の底面まで約50㎝を測るが、当初設定した南北トレンチに墓壙が納まってしまったため、墓壙の切り込み面、木棺そのものの検出は不可能であった。墓壙は地山である黄褐色粘土を約10㎝掘り込んでいるのみであり、おおむね盛土内におさまるものと考えられる。墓壙内は、花崗岩の風化バイラン土を多く含む黄白色の砂質土で埋められている。

墓壙内部には、底面上に乗ると考えられる偏平な河原石が、墓壙の南北のそれぞれの端より約30㎝の地点で２個づつ検出された。南側のものは南北に２個、径約25㎝を測る大きな角のとれた河原石に重さなるように、径約30㎝の河原石が検出された。北側のものは東西に接して径約30㎝と径約20㎝の２個の角のとれた河原石が並らんでおり、それぞれの石の北側の上部より須恵製の杯身と杯蓋がふせた状態で検出された。これらの河原石は木棺をのせていた棺台と考えられる。南北両側の河原石は、約13㎝のレベル差をもって南側が高く、そこにすえられた木棺の内部に納められていた遺



第５図　主体部実測図

体の頭位を考える上で示唆的である。

また出土した須恵製の杯身、杯蓋は、木棺内の遺物の可能性もあるが、その出土状況から推測して、木棺埋葬時から棺台の上に置れていた可能性が高い。墓壙の北東コーナーより南へ約25㎝、西へ約15㎝の付近で、木棺に使用したと考えられる鉄釘の小片も1点検出した。

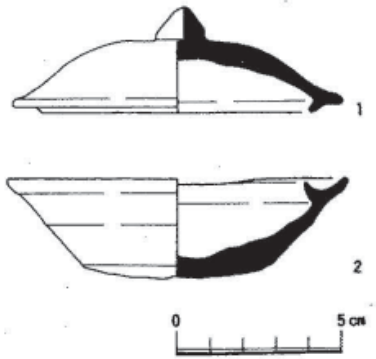
3. 出土遺物（第6図、図版2）

奥ノ谷1号墳からの遺物の出土は、主体部よりの須恵器の杯身、杯蓋の2点、鉄釘の破片と考えられる鉄の小片1点のみであり、盛土からの遺物の出土はみられなかった。

杯蓋（第6図－1）は、口径10.0㎝、器高3.2㎝を測る。天井部外面中央には、宝珠様つまみを有する。口縁部のかえりは比較的長く内傾し、口縁端部よりも下方に伸びている。内外面共に回転ナデを施し、外面全体には自然釉が付着している。また胎土中に径5㎜程の石粒が含まれていたためか、外面に石粒を回転ナデの際に引きずった痕跡が深く入っていた。焼成は良好で、内外面共に灰紫色を呈す。

杯身（第6図－2）は、口径10.4㎝、器高3.1㎝を測る。口縁部は外側上方にまっすぐ立ち上がるが、たちあがりは受部端上面よりも下方にとどまっている。端部のひずみは著しく、成形も粗雑である。底部外面はヘラ切り未調整であり、それ以外の内外面は回転ナデが施されている。胎土は1㎜内外の長石などの石粒を含み、焼成は良好で、内外面共に灰青色を呈す。

この2点の須恵器は、杯身がⅡ型式6段階、杯蓋がⅢ型式1段階に位置づけられ、出土遺物から想定される奥ノ谷1号墳の造営時期は7世紀前半の比較的新しい時期と考えられる。



第6図　出土遺物実測図

第4章　ま　と　め

今回の試掘調査にかかる奥ノ谷1号墳のトレンチ調査と墳丘測量調査により、おおむね次のことが理解できた。

① 奥ノ谷1号墳は、長径約20ｍ、短径約14.5ｍ、墳高約2ｍを測る楕円形の墳丘をもつ。

② 墳頂部には、木棺直葬による主体部が遺存していた。

③ 副葬品は、須恵器製の杯身、杯蓋のセットが出土したのみである。そしてこの遺物により奥ノ谷1号墳の造営年代は、おおよそ7世紀前半の比較的新しい時期と考えられる。

④ 奥ノ谷1号墳は、伏見堂地域の古墳群の中で確実に7世紀代に下がる古墳であり、急峻な斜面を登りつめた尾根筋を占める立地も、この地域の古墳には従来見られないものであった。

今後、伏見堂地域に分布する古墳群の中で、奥ノ谷古墳群の意味を追求する必要があろう。

表1　嶽山の植物（草本）　　開花月の（実）は果実または種子を示す；出現区域の*は個体数の目安（*:少ない, **：やや多い, ***:多い）

No.	種名	科名	原産	1～2年草 or 多年草	開花月	出現区域 A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L
1	カンサイタンポポ	キク科	在来種	多年草	1-5, 9, 12	***	*					**	*	**	*		*
2	セイヨウタンポポ	キク科	ヨーロッパ	多年草	1-12							*	*				
3	オオイヌノフグリ	ゴマノハグサ科	ヨーロッパ	2年草	2-5	**	*							**	*		
4	オランダミミナグサ	ナデシコ科	ヨーロッパ	2年草	2-4	**							*				
5	シロバナタンポポ	キク科	在来種	多年草	2-3								*				
6	ナズナ	アブラナ科	在来種	2年草	2-6	***						*	*	*	*		
7	ハコベ	ナデシコ科	在来種	1～2年草	2-5, 11-12	***	*			*		***	*	*	*		*
8	ヒメオドリコソウ	シソ科	ヨーロッパ	2年草	2-4	***				*				*			
9	ミミナグサ	ナデシコ科	在来種	2年草	2-5	*	*					*	*	*			
10	ウシハコベ	ナデシコ科	在来種	多年草	3-12	*				*		*	*			*	
11	カラスノエンドウ	マメ科	在来種	2年草	3-5	**						*	*				
12	シハイスミレ	スミレ科	在来種	多年草	3						*						
13	ショウジョウバカマ	ユリ科	在来種	多年草	3						*						
14	スズメノヤリ	イグサ科	在来種	多年草	3-5	***						*	*				*
15	スミレ	スミレ科	在来種	多年草	3								*				
16	タチツボスミレ	スミレ科	在来種	多年草	3-4	*				*	*			*			
17	タネツケバナ	アブラナ科	在来種	2年草	3-4	*							*	*		*	
18	ノゲシ（ハルノノゲシ）	キク科	在来種	2年草	3-6, 12	*	*			*		*	*	*	*		
19	ヒメウズ	キンポウゲ科	在来種	多年草	3-5					*			*	*			
20	フキ	キク科	在来種	多年草	3									*			
21	ヘビイチゴ	バラ科	在来種	多年草	3-4, 9, (実11)					*		*	*				
22	ホトケノザ	シソ科	在来種	2年草	3-4, 11	**						*					
23	アメリカフウロ	フウロソウ科	北アメリカ	1年草	4-6, 9	**						*	*	***			*
24	イワニガナ（ジシバリ）	キク科	在来種	多年草	4					*							
25	ウマノアシガタ	キンポウゲ科	在来種	多年草	4-6	*	*						**			*	**
26	オオジシバリ	キク科	在来種	多年草	4	*											
27	オニタビラコ	キク科	在来種	多年草	4-5	*	*					**		*			
28	オニノゲシ	キク科	ヨーロパ	2年草	4, 11							*		*			
29	カキドオシ	シソ科	在来種	多年草	4								**				
30	カサスゲ	カヤツリグサ科	在来種	多年草	4												*
31	カタバミ	カタバミ科	在来種	多年草	4-10	*				*		*	*		*		
32	キュウリグサ	ムラサキ科	在来種	多年草	4-5	*						*		*			
33	キランソウ	シソ科	在来種	多年草	4												*
34	ゲンゲ（レンゲソウ）	マメ科	中国	2年草	4	***											
35	コマツヨイグサ	アカバナ科	北アメリカ	2年草	4-7							*					
36	コメツブツメクサ	マメ科	ヨーロッパ	1年草	4-6	**						*	*	*			
37	シャガ	アヤメ科	在来種	多年草	4	*											

表1　嶽山の植物(草本)　　開花月の（実）は果実または種子を示す；出現区域の*は個体数の目安（*:少ない, **：やや多い, ***:多い）

No.	種名	科名	原産	1～2年草 or多年草	開花月	出現区域 A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L
38	シロツメグサ	マメ科	ヨーロッパ	多年草	4-11	*	*					*	*	*		***	*
39	スイバ	タデ科	在来種	多年草	4-5	***						*	*				*
40	スズメノエンドウ	マメ科	在来種	1～2年草	4	**							*			*	
41	スズメノテッポウ	イネ科	在来種	2年草	4-6	**											
42	チゴユリ	ユリ科	在来種	多年草	4						**						
43	チチコグサ	キク科	在来種	多年草	4-6	*			*				*				
44	ツボミオオバコ	オオバコ科	北アメリカ	1～2年草	4-5							*	**	***			
45	ニガナ	キク科	在来種	多年草	4-6	*	*	*		*	*			*	*		*
46	ハハコグサ	キク科	在来種	2年草	4-9	*	*		*			*	*	*			
47	ムギクサ	イネ科	ユーラシア	1～2年草	4-6							*	***				
48	ムラサキケマン	ケシ科	在来種	2年草	4									*			
49	ムラサキサギゴケ	ゴマノハグサ科	在来種	多年草	4-5	*											**
50	ヤエムグラ	アカネ科	在来種	2年草	4-6	*	*			*			***	***		*	
51	ヤブジラミ	セリ科	在来種	2年草	4-5	*					*						
52	ヤブニンジン	セリ科	在来種	多年草	4									*			
53	アレチギシギシ	タデ科	ユーラシア	多年草	5-6					*		*	**				
54	イヌムギ	イネ科	北アメリカ	多年草	5-6							*					
55	オオタチツボスミレ	スミレ科	在来種	多年草	5										*		
56	オオバコ	オオバコ科	在来種	多年草	5-11	*	**			*		*		**	*	*	**
57	オヘビイチゴ	バラ科	在来種	多年草	5												*
58	キキョウソウ	キキョウ科	北アメリカ	1年草	5							*					
59	ギシギシ	タデ科	在来種	多年草	5, 12	*						*					
60	コウゾリナ	キク科	在来種	多年草	5							*					
61	コヒルガオ	ヒルガオ科	在来種	多年草	5-6								*	*	*		
62	シナダレスズメガヤ	イネ科	南アフリカ	多年草	5-9							***					
63	タツナミソウ	シソ科	在来種	多年草	5												*
64	ツルアリドオシ	アカネ科	在来種	多年草	5						*						
65	ドクダミ	ドクダミ科	在来種	多年草	5-6	**							*	**			*
66	ナヨクサフジ	マメ科	ヨーロッパ	多年草	5							*					
67	ニワゼキショウ	アヤメ科	北アメリカ	多年草	5-6	*		*								*	**
68	ハルジオン	キク科	北アメリカ	多年草	5	*											
69	ヒメコバンソウ	イネ科	ヨーロッパ	1年草	5		*										
70	ヒメジョオン	キク科	北アメリカ	1～2年草	5-12	**	*			*		**	*	**	*	*	*
71	ブタナ	キク科	ヨーロッパ	多年草	5-9		*		*	*							
72	ムラサキカタバミ	カタバミ科	南アメリカ	多年草	5-9	*							*		*		
73	ヨウシャヤマゴボウ	ヤマゴボウ科	北アメリカ	多年草	5-9, (実9-11)	*	*		*	*		*	**	*	*		*
74	アキノエノコログサ	イネ科	在来種	1年草	6-11	**	**		*	*		**	*		**	**	

表1　嶽山の植物（草本）　　開花月の（実）は果実または種子を示す；出現区域の*は個体数の目安（*:少ない，**：やや多い，***:多い）

No.	種名	科名	原産	1～2年草 or多年草	開花月	出現区域											
						A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L
75	アレチノギク	キク科	南アメリカ	1～2年草	6-9							*					
76	アレチハナガサ	クマツヅラ科	南アメリカ	多年草	6-11							*				*	
77	ウツボグサ	シソ科	在来種	多年草	6-8			*				*					*
78	エノコログサ	イネ科	在来種	1年草	6-10	*						**	*	*			
79	オカトラノオ	サクラソウ科	在来種	多年草	6	*	*			*			*				
80	オヤブジラミ	セリ科	在来種	2年草	6		*			*				**			
81	カゼクサ	イネ科	在来種	多年草	6, 9-11	*								*	*	**	
82	ガマ	ガマ科	在来種	多年草	6-9		*										
83	カワラナデシコ	ナデシコ科	在来種	多年草	6											*	
84	クサイ	イグサ科	在来種	多年草	6							*					**
85	ササユリ	ユリ科	在来種	多年草	6												*
86	スズメノヒエ	イネ科	在来種	多年草	6-11	*						***	**	*			*
87	チガヤ	イネ科	在来種	多年草	6	*	*						*				
88	チチコグサモドキ	キク科	在来種	1～2年草	6-11	*								*			
89	トウバナ	シソ科	在来種	多年草	6-9	*								*			
90	トキワハゼ	ゴマノハグサ科	在来種	1年草	6, 9	*									*		
91	ネジバナ	ラン科	在来種	多年草	6	*							*				
92	ネズミムギ	イネ科	ユーラシア	1～2年草	6								*				
93	ノアザミ	キク科	在来種	多年草	6-11	*								*	*		*
94	ノボロギク	キク科	在来種	1～2年草	6					*							
95	ベニバナボロギク	キク科	アフリカ	1年草	6-11		*		*	*		**	*				
96	ホタルブクロウ	キキョウ科	在来種	多年草	6											*	
97	マメグンバイナズナ	アブラナ科	北アメリカ	2年草	6-7							*	*				
98	ミヤマタニソバ	タデ科	在来種	1年草	6-9				*								
99	ムラサキニガナ	キク科	在来種	多年草	6-8						*						
100	ヤブガラシ	ブドウ科	在来種	多年草	6-9	**	*					**	***		**		
101	ワルナスビ	ナス科	北アメリカ	多年草	6-8							*					*
102	アオツヅラフジ	ツヅラフジ科	在来種	多年草	7,（実9-12）										*		*
103	オギ	イネ科	在来種	多年草	7	*											
104	オシロイバナ	オシロイバナ科	栽培種	1年草	7-9								*		*		
105	セリ	セリ科	在来種	多年草	7-8	*											*
106	センニンソウ	キンポウゲ科	在来種	多年草	7-8	*									*	*	
107	ノギラン	ユリ科	在来種	多年草	7-8						*						
108	ヒラタゴボウ	アカバナ科	北アメリカ	1年草	7												*
109	ヘクソカズラ	アカネ科	在来種	多年草	7-8		*	*		*	*	**	**	*	*		*
110	ホソバアキノノゲシ	キク科	在来種	1～2年草	7-10	*						*	*				
111	ムラサキツメクサ	マメ科	ヨーロッパ	多年草	7		*										

表1 嶽山の植物(草本)　　開花月の（実）は果実または種子を示す；出現区域の*は個体数の目安（*:少ない, **：やや多い, ***:多い）

No.	種名	科名	原産	1～2年草 or多年草	開花月	出現区域 A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L
112	メマツヨイグサ	アカバナ科	北アメリカ	2年草	7-8		*					**	*				
113	ヤナギハナガサ	クマツヅラ科	南アメリカ	多年草	7											*	
114	アキノタムラソウ	シソ科	在来種	多年草	8-11	***					*			*	*	**	**
115	アキノノゲシ	キク科	在来種	1～2年草	8-11	*						*			*	*	
116	アメリカイヌホウズキ	ナス科	北アメリカ	1年草	8-11（実11）	*	*			*		*	*				
117	イタドリ	タデ科	在来種	多年草	8-10	*	*			*		*	***				
118	イヌガラシ	アブラナ科	在来種	多年草	8-11	*								*			*
119	オオアレチノギク	キク科	南アメリカ	1～2年草	8-12	*	*		***			*	*		*	*	
120	オトギリソウ	オトギリソウ科	在来種	多年草	8-9			*									
121	オニドコロ	ヤマノイモ科	在来種	多年草	8-9						*		***				*
122	オミナエシ	オミナエシ科	在来種	多年草	8			*									
123	カナムグラ	クワ科	在来種	1年草	8-9							**	*		*		
124	カラスウリ	ウリ科	在来種	多年草	8,（実11, 12）	*	*				*	*	***	*			
125	ガンクビソウ	キク科	在来種	多年草	8						**						
126	キツネノマゴ	キツネノマゴ科	在来種	1年草	8-11	**	*					*	**	*		*	*
127	キンミズヒキ	バラ科	在来種	多年草	8-9	*					**		*				
128	ケイトウ	ヒユ科	栽培種	1年草	8	*											
129	コケオトギリ	オトギリソウ科	在来種	1年草	8	*											
130	コヤブタバコ	キク科	在来種	2年草	8						*						
131	タカサゴユリ	ユリ科	台湾	多年草	8			*									
132	タカサブロウ	キク科	在来種	1年草	8-9	*							*				
133	ツユクサ	ツユクサ科	在来種	1年草	8-10	*	**		*	*		*	*	*	*	*	*
134	ヌスビトハギ	マメ科	在来種	多年草	8		*				*						
135	ノブドウ	ブドウ科	在来種	多年草	8-9,（実11）	*						*	*		*		
136	ヒナタイノコヅチ	ヒユ科	在来種	多年草	8-10	***	*			*		*		*	*		*
137	ヒメムカシヨモギ	キク科	北アメリカ	2年草	8-10	*	*		***			***	**	*		*	*
138	ヒヨドリバナ	キク科	在来種	多年草	8-11	*		*	*	*	*	*				*	
139	ヒルガオ	ヒルガオ科	在来種	多年草	8							***					
140	フユイチゴ	バラ科	在来種	多年草	8-9,（実1-2, 10-12）		*			*	**		*	*	*		*
141	ホウキギク	キク科	北アメリカ	1年草	8-10	*						*				*	
142	メヒシバ	イネ科	在来種	1年草	8-10	**						***	*			*	
143	ヤハズソウ	マメ科	在来種	1年草	8			*	*								
144	ヤブツルアズキ	マメ科	在来種	多年草	8-9	*	**										
145	ヤブラン	ユリ科	在来種	多年草	8					*							
146	ヤマイ	カヤツリグサ科	在来種	多年草	8-9			**									
147	ヤマノイモ	ヤマノイモ科	在来種	多年草	8		*	*					*				
148	ヨメナ	キク科	在来種	多年草	8-12	*	*				*			*	*	*	**
149	ヨモギ	キク科	在来種	多年草	8-11	*	*	*		*		**		*	*	**	

表1 嶽山の植物(草本)

開花月の（実）は果実または種子を示す；出現区域の*は個体数の目安（*:少ない, **：やや多い, ***:多い）

No.	種名	科名	原産	1～2年草 or 多年草	開花月	出現区域 A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L
150	ワレモコウ	バラ科	在来種	多年草	8-11	*		*						*		*	
151	アカザ	アカザ科	在来種	1年草	9		*										
152	アカネ	アカネ科	在来種	多年草	9	*	*						*				*
153	アメリカセンダングサ	キク科	北アメリカ	1年草	9-11	*	*		*			*				*	
154	アレチウリ	ウリ科	北アメリカ	1年草	9								*				
155	アレチヌスビトハギ	マメ科	アメリカ	多年草	9	*	*	*		*			*				
156	アレチマツヨイグサ	アカバナ科	北アメリカ	1～2年草	9							*	*				
157	イヌコウジュ	シソ科	在来種	1年草	9-10	*		*		*							
158	イヌタデ	タデ科	在来種	1年草	9-11	*	*			*		*	*	*			*
159	オオイヌタデ	タデ科	在来種	1年草	9-10				*			**					
160	オオオナモミ	キク科	メキシコ	1年草	9(実10-11)	*								*		*	
161	オオニシキソウ	トウダイグサ科	北アメリカ	1年草	9-10	*						*					
162	オヒシバ	イネ科	在来種	1年草	9	*								*	**		
163	カラムシ	イラクサ科	在来種	多年草	9								*	*			
164	キンエノコロ	イネ科	在来種	1年草	9-10	*						*		*	*	*	
165	クズ	マメ科	在来種	多年草	9								*				
166	ゲンノショウコ	フウロソウ科	在来種	多年草	9	*											
167	コオニタビラコ	キク科	在来種	2年草	9					*							
168	コセンダングサ	キク科	在来種	多年草	9											*	
169	コニシキソウ	トウダイグサ科	北アメリカ	1年草	9								*				
170	サワヒヨドリ	キク科	在来種	多年草	9-10			*									
171	ジャノヒゲ	ユリ科	在来種	多年草	(実9)						*						
172	ススキ	イネ科	在来種	多年草	9-10	**	**			*		***	***			*	*
173	スズメウリ	ウリ科	在来種	1年草	(実9, 11)	*						*	*				
174	セイタカアワダチソウ	キク科	北アメリカ	多年草	9-12	***	**	*	*	*		***	***	*		***	
175	センダングサ	キク科	在来種	1年草	9							*					
176	ダントボロギク	キク科	北アメリカ	1年草	9		*		*			*					
177	チカラシバ	イネ科	在来種	多年草	9-11	*	*							*			
178	チヂミザサ	イネ科	在来種	1年草	9-11	*	*			*	*			**	**		*
179	ツリガネニンジン	キキョウ科	在来種	多年草	9-11	*									*		
180	ツルボ	ユリ科	在来種	多年草	9										*		
181	ツルリンドウ	リンドウ科	在来種	多年草	9-10, (実11-12)					*	*						
182	トキリマメ	マメ科	在来種	多年草	9	*											
183	ナキリスゲ	カヤツリグサ科	在来種	多年草	9		*										
184	ノアズキ	マメ科	在来種	多年草	9												*
185	ハッカ	シソ科	在来種	多年草	9								*				
186	ヒカゲイノコヅチ	ヒユ科	在来種	多年草	9-11	*	*			*	*	*	*	*			*
187	ヒガンバナ	ヒガンバナ科	在来種	多年草	9	*				*			*	*	*		

表1　嶽山の植物(草本)　　開花月の（実）は果実または種子を示す；出現区域の*は個体数の目安（*:少ない, **：やや多い, ***:多い）

No.	種名	科名	原産	1～2年草 or多年草	開花月	出現区域 A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L
188	ヒメクグ	カヤツリグサ科	在来種	多年草	9	*								*			
189	ヒヨドリジョウゴ	ナス科	在来種	多年草	9,(実10-12)		*			*	*	*	*	*	*		
190	ブタクサ	キク科	北アメリカ	1年草	9							**				*	
191	ホシアサガオ	ヒルガオ科	南アメリカ	1年草	9								*				
192	ボントクタデ	タデ科	在来種	1年草	9-10	*	*				*					*	
193	ママコノシリヌグイ	タデ科	在来種	1年草	9-10							*					*
194	ミズヒキ	タデ科	在来種	多年草	9									*			
195	メドハギ	マメ科	在来種	多年草	9			*									
196	メリケンカルカヤ	イネ科	北アメリカ	多年草	9-11			*				***					
197	ヤブマメ	マメ科	在来種	多年草	9	*											*
198	ヤマジノホトトギス	ユリ科	在来種	多年草	9						*						
199	イナカギク	キク科	在来種	多年草	10	*										*	
200	イヌビエ	イネ科	在来種	1年草	10											*	
201	クルマバナ	シソ科	在来種	多年草	10											*	
202	コゴメカヤツリ	カヤツリグサ科	在来種	1年草	10								*				
203	センブリ	リンドウ科	在来種	1～2年草	10-11			*									
204	ノジギク	キク科	在来種	多年草	10												*
205	ミゾソバ	タデ科	在来種	1年草	10-11	*	*										**
206	ヤクシソウ	キク科	在来種	1～2年草	10-11	*											
207	ヤノネグサ	タデ科	在来種	1年草	10	*										*	*
208	リンドウ	リンドウ科	在来種	多年草	10		*										
209	アオゲイトウ	ヒユ科	北アメリカ	1年草	11							*					